

家島に行つて

本田正次

瀬戸内海国立公園の中に家島諸島という幾つかの離島があることはかねてから聞いて知っていたが、実際に足を留める機会を得たことは昨年11月であった。

姫路の野路菊保存会の方々、兵庫高校の室井博士らのご尽力によって、その機会を与えられたのである。自然公園審議会の委員は5年前にやめたが、長い間この方面の仕事をしている私にとって、この度の機会は待望のものであり、とてもうれしいことであった。関係の方々にも厚くお礼を申し上げたい。

日没の早い11月の末のことで、家島本島の真浦港に船が着いたのは夕方6時を廻っていたので、すでに闇の中で何も見えなかった。翌朝も9時前には港を出なければならなかったので、本島は残念ながら草木など眺める時間はほとんどなかった。

ただ旅館の近くの路傍にシマカンギクの黄色い花が咲いているのが、関東者の私にはちょっと物珍しく思われた。また、遠望だったので、確かなことはいえないが、山林を彩る2・3の紅葉はヤマハゼであろうか、もしそうだとすれば、これも主としてヤマウルシの紅葉を見られている関東者の私にはやはり珍しい眺めである。

船が天神鼻の近くを回る時に、宮の境内林らしい美しい森が見えた。樹種を区別する由もないが、常緑樹の森はいつ見ても気持がよい。いつまでも残しておきたいような森の姿であった。

やがて矢野島に着いた。家島本島と坊勢島との中間にあって、5万の地図で見ればひとつまみにも足りないような小さな無人島である。狭いながらも船をつけるような浜もあった。浜には型の如くひととおりの海岸植物の種類もあり、またいつ誰が作ったかは知らないが畑の跡らしいものもみられ、今はクズの跋扈に任せきりとなっていて、こんな猫額の土地にも人と自然との戦いがあるのかと、ちょっぴりセンチになって考えないわけにはゆかなかった。

ツルナのみるからにうまさうな葉があちこちにもくもくと茂っていたので、摘んで家づつになし、またできれば根つぎのまま東京に持ち帰って自分の庭に植え、冬野菜にでもしようかと心ひそかに考えていたが、帰るときには物の見事に忘れていた。

フジナデシコも大量にはえていて、これには名前を示す藤色の花が咲いており、花の少ない初冬の浜辺にまさ

に画竜点睛の観が見られた。

浜辺のすぐ背後は崖地となっており、すくすくと伸びたヤダケの群が立っている。聞けば崖道をよじて、山の頂に出ればヤダケの大群落があるという。むかし、このヤダケをとって矢を作ったとか、または矢を作るためにこの島にヤダケを植えたのが初まりであるとか、いろいろの話があるようだが、くわしいことは私にはわからない。いずれにしても、こんな小さい島に、これほどのヤダケの大群落が見られることはよほど珍しいことと思う。矢野島（または矢の島か）の名はもちろんヤダケが生え、矢を作ったということから起こったものに相違あるまい。

正確なことは室井博士から承ることができれば幸である。

室井博士といえば、実は矢野島に直接ご案内していただけるものとばかり楽しみにしていたのであるが、さる、お目出たいすじの用件があって、家島本島から姫路に帰ってしまったので、こればかりは是非もない。

矢野島にはバクチノキがあるから、行ったら見のがさないようにと、前から室井博士から注意されていたので、一行の者が目をさらのようにして、それと思われる個所を探したが、どうしても見当らない。さては枯れてしまったのではないかと、博士には申しわけがないが、なかば諦めかけているところへ、案内の岸本氏、東氏らが、危険な崖をよじのぼったりなどして苦心探索の結果、とうとう見つけることに成功し、一同快感を叫びながら意気揚々船にひきあげ、家島本島まで帰ってきた。

これで室井博士には申しわけがたった次第である。博士の話によると、バクチノキは播磨の本土の方にはほとんど見つからないということなので、矢野島のバクチノキはその意味で貴重な分布ということができよう。木は細かったが、株はかなりの数あるように見受けられた。私はどこかあまり遠く離れていない処に大きく育った老木のバクチノキがあるのではなからうかと思ったりしてみた。

とにかく見つかってよかった。

バクチノキは南は台湾から琉球列島を経て九州、四国というふうに北上し、関東まで達して太平洋の海岸近くの山に自生している種類だから、これが播磨地方の海岸近くに見られないということが、むしろ私には不思議な

くらいである。

ヤダケの群落といい、バクチノキの自生といい、矢野島の植生の特徴としていつまでも保護していきたい。行をともにされた朝日新聞の西崎記者の語るところによれば、西島ではすでに観光施設もかなり見られるようになったとのこと、瀬戸内海上に浮かぶ国立公園の飛石であるから、観光も大切であり、施設も必要であるが、植物や地形、その他の美しい自然や学問上の資料までも破壊して、元も子も無くすような観光施設のありかたには私は反対である。

美しい自然や大切な資源があって、それを対象にして

こそ観光が成りたつことは自明の理で、見るべき植物を伐り払い、貴い地形を取りこわして、その跡にたとえどんな立派なホテルを建ててみたところで、これでは都会の真中にできたホテルと何ら変わりはあるまい。

私の見た範囲では幸いにして家島の各島はまだまだ無疵にちかい。

植物を初めとして保護すべきものほどこまでも保護するように努めていきたい。家島滞在20時間の短見ではあるが、いささか心の奥底に気にかかることがないわけでもなかったので、老婆心、いや老爺心ながら書いてみた。

(東京大学名誉教授・理学博士)